

アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と 活用に関する研究

Research on Building and Utilizing Network for River Restoration in Asia

水循環・水環境グループ 研究員 後藤 勝洋
技術参与 土屋 信行
まちづくり・防災グループ 研究員 阿部 充
まちづくり・防災グループ 研究員 佐治 史
自然環境グループ 研究員 澤田みつ子

「日本河川・流域再生ネットワーク (Japan River Restoration Network : JRRN)」は、2006年11月の設立以降、河川再生に関する情報を交換・共有することを通じ、会員間のコミュニティーを拡げながら、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的として種々の活動を展開している。また、国際的な河川再生に関する知識・技術情報の交換と人材交流を目的に設立された「アジア河川・流域再生ネットワーク (Asian River Restoration Network : ARRAN)」の日本窓口を担い、中国・韓国等のアジア各国との協働・連携を進めている。

本稿では、当研究所と(株)建設技術研究所国土文化研究所が共同で運営するARRN/JRRN事務局の2017年度の活動と最近の表彰実績を報告する。

キーワード：国際ネットワーク、情報共有、河川再生、小さな自然再生、人材育成

The Japan River Restoration Network (JRRN) has been performing various kinds of activities with the aim of contributing to development of the technologies and systems for river restoration that are appropriate for each area while expanding the community of their members through exchange and sharing of river restoration-related information since its foundation in November 2006. It also acts as a contact point in Japan for the Asian River Restoration Network (ARRN), which was established for the purposes of exchange of knowledge and technologies related to international river restoration and people-to-people exchange, and is promoting collaboration and cooperation with China, Korea, and other countries in Asia.

In this article, we will report the activities conducted by ARRAN and JRRN in 2017, which are operated jointly by our research center and Research Center for Sustainable Communities of CTI Engineering Co., Ltd. and the recent awards received by us.

Keywords: international network, information sharing, river restoration, small-scale nature restoration, cultivation of human resources

1. はじめに

2006年3月、「第4回世界水フォーラム」の自然再生に関する日本、中国及び韓国3ヶ国合同分科会において、河川・流域再生の情報交換ネットワークやデータベースの構築及びアジア地域の特性に対応した河川・流域再生ガイドライン（技術指針）の作成に向けたアジア諸国の連携の必要性が提言された。この提言を受け、2006年11月に東京で開催された「第3回水辺・流域再生に関わる国際フォーラム」の場で「アジア河川・流域再生ネットワーク」(Asian River Restoration Network、以下「ARRN」という)が日中韓の関係機関（リバーフロント整備センター（現リバーフロント研究所）・中国水利水電科学研究院・韓国建設技術研究院）により設立された。当研究所は、ARRNメンバーである日本、韓国、中国の3カ国協働で取り組む活動の企画や進行管理、ARRNホームページの管理等のARRNネットワークの事務作業を担うと共に、ARRNの国・地域にあたる組織である日本河川・流域再生ネットワーク（以下「JRRN」という）の事務局を担ってきた。

2010年度以降、活動の発展と体制強化を目的として、ARRN事務局及びJRRN事務局運営に関連した活動は、当研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所の2社が共同研究で運営している。ARRNにおける活動や情報をJRRN会員に還元するとともに、日本国内の河川再生に関する情報を共有する活動を行っている。

本稿は、ARRN/JRRN事務局の2017年度の活動と最近の表彰実績について報告するものである。

2. ARRN/JRRNの組織概要

2-1 ARRNの組織概要

ARRNは、中立の立場で、類似した社会・自然環境を有するアジア・モンスーン地域における河川・流域再生に関わる知見を共有し、ネットワーク参加者の知識・技術の向上を図ることを目的に、主に以下の活動に取り組んでいる。

- ・関連情報のウェブサイト等を通じた普及
- ・国際フォーラムやワークショップの開催
- ・ガイドラインの作成・普及
- ・各国・地域間での講師・専門家派遣・現地視察企画等の支援
- ・調査研究・出版・広報活動 等

ARRN(図-1)は参加各国・地域のネットワーク(RRN)の連携で組織され、ARRN運営方針や活動計画は各国RRN代表者よりなる「ARRN運営会議」で決定され、「運

営会議」の支援機能として2つの委員会(情報委員会・技術委員会)及び事務局が設置されている。現在、日中韓台の国・地域ローカルネットワーク(RRN)会員、及びマレーシアやタイなどの政府機関やNGO等の個別組織が会員に含まれる。

ARRN事務局は、設立(2006年)以来、日本(JRRN)が担っていたが、2013年より各国RRNがローテーションで務めることとなり、2012~2015年は中国(CRRN)、2015~2017年は韓国(KRRN)が担い、2017年より再び日本(JRRN)が務めることが第11回ARRN運営会議(2016.8韓国開催)にて決定した。

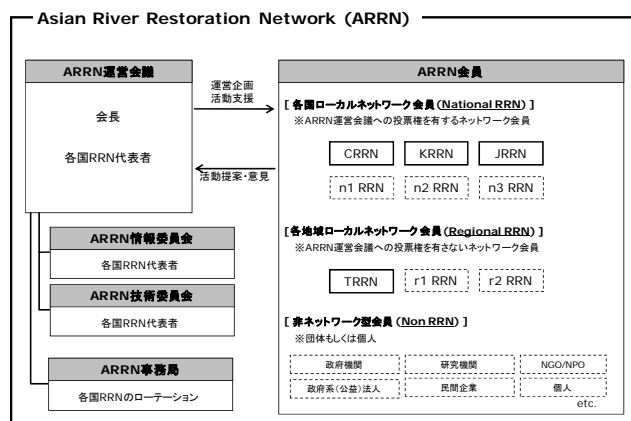


図-1 ARRNの組織体系

2-2 JRRNの組織概要

JRRNは、ARRNの日本国内活動を担う下部組織として、個人や団体組織などの参加会員を募り定期的な情報共有活動を展開している。JRRNは設立当初より、活動の主役は日本国内で河川再生に係る活動を行う組織・個人を主役とし、それらの人々、組織の情報交流をサポートする活動を行うことを目的に、主に以下をテーマとした活動に取り組んでいる。

- ・河川再生に関わる情報共有基盤整備
- ・河川再生の普及・啓発に向けた行事等の実施
- ・河川再生に関わる調査研究
- ・河川再生に関する冊子等の発行
- ・河川再生の推進に向けた国内外団体の支援や協働

JRRN設立以降12年が経過した2018年7月時点において、個人会員は781名、組織会員60団体の組織となっている。会員数としての組織の規模は現在も増加傾向にあるが、組織としての規約、具体的な運営体制については明確に定められていない任意組織として活動を展開してきた。将来的に多角的な分野の知見、多様な主体からの視点を踏まえた活動展開を図るため、現組織の法人化を含む、今後の体制強化のあり方について議論を進めている。

2. 2017年度のJRRN 活動内容

ARRN 及び JRRN の目的を達成するため、2017年度は表-1に示す活動を実施した。特に重点的に取り組んだ活動として、“水辺の「小さな自然再生」現地研修会による

川づくり人材育成（「小さな自然再生」普及促進プロジェクト）”、“水辺・流域再生にかかわる国際フォーラム・ARRN 運営会議”が挙げられ、次章以降にそれらの活動について紹介する。

表-1 2017年度の主な活動概要

テーマ	ARRN 関係	JRRN 関係
河川再生に関わる情報共有基盤整備	<ul style="list-style-type: none"> ARRN ウェブサイト運営 	<ul style="list-style-type: none"> JRRN ニュースレター発行（毎月発行） JRRN ニュースメール発行（毎週配信） JRRN/ARRN ウェブサイト運営（随時更新） JRRN-facebook 運営（随時更新） 「小さな自然再生」ウェブサイト運営 「小さな自然再生」普及・啓発動画作成 
河川再生の普及・啓発に向けた行事等の実施	<ul style="list-style-type: none"> 「第14回水辺・流域再生にかかわる国際フォーラム」開催（2017.8 マレーシア・クアラルンプール）  <p>第14回 ARRN 国際フォーラム</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「小さな自然再生」現地研修会開催（2017.10 福井県、2017.12 岡山県、2018.2 秋田県）  <p>福井県研修会 岡山県研修会 秋田県研修会</p>
河川再生に関わる調査研究	—	<ul style="list-style-type: none"> 水辺の「小さな自然再生」現地研修会による川づくり人材育成（河川基金助成事業）
河川再生に関する冊子等の発行	—	<ul style="list-style-type: none"> 「桜のある水辺風景 2017 写真集」発行 「小さな自然再生現地研修会 開催報告」発行  <p>桜のある水辺風景 2017 写真集 現地研修会開催報告</p>
河川再生の推進に向けた国内外団体の支援や協働	<p>【海外活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「第12回 ARRN 運営会議」、「第14回 ARRN 国際フォーラム」企画調整・運営協力（2017.8 マレーシア・クアラルンプール） 「第13回 ARRN 運営会議」、第15回 ARRN 国際フォーラム企画調整（2018.8 東京開催予定） 「第1回アジア国際水週間」分科会「気候変動と河川再生」参加・運営協力（2017.9 韓国・慶州） パブリックフォーラム「アジアの都市河川再生」、及び「環境NGO 座談会」等参加（2017.11 香港）  <p>第12回 ARRN 運営会議 第1回アジア国際水週間 分科会</p>	<p>【国内活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> 水の巡回展運営協力 東彼杵町水辺からのまちおこし企画運営協力 「応用生態工学会国際シンポジウム 2017」共催（2017.12 東京） 海外視察団受け入れ支援  <p>水の巡回展 東彼杵町水辺からのまちおこし 応用生態工学会国際シンポジウム 2017 香港視察団現地視察支援</p>

3. 「小さな自然再生」普及促進プロジェクト

3-1 「小さな自然再生」とは

JRRNでは、「小さな自然再生」の取組みの普及促進のための活動を行っている。「小さな自然再生」とは、“みんなで発案・協働する手づくりの自然再生”で、後述する「小さな自然再生」研究会では、次の3つの条件を満たす取組みを「小さな自然再生」と定義している。

- ①自己調達できる資金規模であること
- ②多様な主体による参画と協働が可能であること
- ③修復と撤去が容易であること

また、「小さな自然再生」の特長は、“川づくりを通じた人づくり・地域づくり”につながることであり、地元の川への愛着の醸成、自然との対話を通じた地域の課題の学び（環境教育）、地域住民の交流の活発化などの波及効果が期待されることから、英語名はそのような意味を込めた「Collaborative Nature Restoration」と訳している。



写真-1 桂川の「小さな自然再生」の例（パーブ工）
（出典：原田守啓・「小さな自然再生」研究会）

3-2 活動経緯

「小さな自然再生」普及促進プロジェクトは、多様な主体が協働し日曜大工的に自然環境の保全・再生に取組む「小さな自然再生」の技術と英知を高め、当分野に取組む人材の育成を図ること、各地域に相応しい新たな取組みを活性化させることを目的として、公益財団法人河川財団の河川基金の助成事業として、これまで4年間（今年度も継続中）活動が続けてきた（表-2）。



図-2 「小さな自然再生」事例集（2015.3発行）

表-2 これまでの活動経緯（2014～2017年度）

年度	主な成果
2014	「小さな自然再生」事例集編集委員会設立 「小さな自然再生」座談会開催 「小さな自然再生」事例集発行（図-2）
2015	「小さな自然再生」研究会設立（改名） 第1回現地研修会@愛知県豊田市・岩本川 開催 「小さな自然再生」自由集会IV 開催 第2回現地研修会@滋賀県長浜市・高時川 開催 「小さな自然再生」ホームページ公開
2016	第3回現地研修会@福岡県福津市・上西郷川 開催 「小さな自然再生」自由集会V 開催 第4回現地研修会@兵庫県西宮市・武庫川 開催 第5回現地研修会@千葉県白井市・神崎川 開催 「小さな自然再生」リーフレット発行
2017	第6回現地研修会@福井県福井市・日野川/志津川 開催 第7回現地研修会@岡山県西粟倉村・吉井川流域 開催 第8回現地研修会@秋田県大仙市・斉内川 開催 「小さな自然再生」普及啓発動画公開

本プロジェクトは、開始当初から「小さな自然再生」の専門家、行政職員、若手技術者等の有志15名で構成される「小さな自然再生」研究会（表-3：2014年に「事例集編集委員会」として設立後、2015年に改名）の協力・指導をいただきながら実施している。

表-3 「小さな自然再生」研究会メンバー

氏名	所属
伊豫岡 宏樹	福岡大学
岩瀬 晴夫	(株)北海道技術コンサルタント
甲斐 崇	(株)四電技術コンサルタント
菊池 佐智子	公益財団法人都市緑化機構
瀧 健太郎	滋賀県立大学
竹内 えり子	(株)建設技術研究所
田中 五月	(一社)ClearWaterProject
中島 満香	プライクウォーターハウスコーパス(株)
長山 昭夫	鹿児島大学大学院
浜野 龍夫	徳島大学大学院
林 博徳	九州大学大学院
原田 守啓	岐阜大学
三橋 弘宗	兵庫県立大学
宮尾 徹	(株)建設技術研究所
吉富 友恭	東京学芸大学

（敬称略 所属は2018年時点）

3-3 水辺の「小さな自然再生」現地研修会による川づくり人材育成

(1) 「小さな自然再生」現地研修会の概要

本研修会は、「小さな自然再生」事例集(図-2)で整理した「小さな自然再生」の考え方、留意点、現場の工夫等を、実際の現場での活動に参加しながら学び、研修参加者の知識と技術の向上及び本分野の知見を蓄積することを目的としている。本研修会を通じ、研修受入先や研修参加者と技術交流を深め、「小さな自然再生」に関わる情報交換と交流のコミュニティ醸成を図るもので、これまで8箇所で開催している。

研修内容は、事例集を教材として、「小さな自然再生」の基本知識や現場での留意点等に関して、講師より講義・事例紹介をいただく「①座学研修」、現場を歩きながら、川の特徴や課題、実施可能な「小さな自然再生」の進め方について議論する「②現地踏査」、課題(テーマ)に対して、現地の状況を踏まえ、各グループで「小さな自然再生」のアイデア出しを行い、全体討論で最適案を議論する「③ワークショップ」、参加者による「小さな自然再生」の施工体験を行う「④現地実習」(河川管理者の協力が得られる場合に実施可)の大きく4つのメニュー(写真-2)があり、研修受け入れ先の要望等を踏まえ、これらを組み合わせて実施している。

2017年度は、福井県・日野川/志津川、岡山県・吉井川、秋田県・斉内川の3箇所で開催しており、以下にそれぞれの開催概要を紹介する(表-4)。



①座学研修



②現地踏査



③ワークショップ



④現地実習

写真-2 現地研修会の内容

(2) 福井県福井市・日野川/志津川現地研修会

福井県・日野川/志津川をフィールドとして開催した現地研修会は、河川管理者である福井河川国道事務所、福井県の協力のもと、地元・関西圏の市民団体、実務者、研究者、行政関係者など計66名が参加し、座学研修、現地踏査、ワークショップの研修内容で実施した。

「魚類の遡上環境の改善～九頭竜川流域の連続性確保に向けて～」をテーマとしたワークショップでは、志津川水閘及びその下流部に存在する落差の解消や既設スロープの改善に着目し、「小さな自然再生」を活用

表-4 2017年度「小さな自然再生」現地研修会

	第6回現地研修会	第7回現地研修会	第8回現地研修会
開催場所	福井県福井市・日野川/志津川	岡山県西粟倉村・吉井川流域	秋田県大仙市・斉内川
開催日	2017年10月17日(火)	2017年12月6日(水)-7日(木)	2018年2月27日(火)
協力団体	国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所、福井県	エーゼロ株式会社、応用生態工学会(大阪地区会、岡山地区会)	秋田県
プログラム	(午前) 座学研修 ①小さな自然再生のすすめ(三橋弘宗:兵庫県立大学) ②川を繋ぎ育む小わざ魚道(浜野龍夫:徳島大学大学院) ③竹蛇籠で魚道を作ってみた:住民モニタリングと遡上効果(山下慎吾:Sakanayama Lab./高知工科大学) ④天王川における連続性確保に向けた魚道整備(福井県) ⑤九頭竜川水系のグリーンインフラ的取組み(福井河川国道事務所) (午後1) 日野川・志津川現地踏査 (午後2) ワークショップ 「魚類の遡上環境の改善～九頭竜川流域の連続性確保に向けて～」	1日目(午前・午後1) 吉井川流域現地踏査 (午後2) 座学研修 ①小さな自然再生のすすめ(三橋弘宗:兵庫県立大学) ②安価に川をつなぐときの注意点(浜野龍夫:徳島大学大学院) ③多主体協働による琵琶湖固有種ビワマス産卵・遡上環境再生の取組み(佐藤祐一:滋賀県琵琶湖環境科学研究センター) ④意見交換 2日目(午前) ワークショップ 「吉井川のつながりを取り戻すには小さな自然再生で何かできるか?」	(午前) 座学研修 ①小さな自然再生のすすめ「河川生態系のしくみ」(三橋弘宗:兵庫県立大学) ②「小さな自然再生と多自然川づくり」(岩瀬晴夫:㈱北海道技術コンサルタント) ③「できることからはじめよう水辺の小さな自然再生」(瀧健太郎:滋賀県立大学) (午後1) 地元の取組みと現地の状況説明 ①河川工事における現状と多自然川づくりへの取組み(秋田県) ②「地域における中学生による自然再生活動」(青谷晃吉:大仙市教育委員会教育アドバイザー) (午後2) ワークショップ 「道の駅と直結した水辺の小さな自然再生と地域の賑わい創出」
参加者	66名(一般参加者:51名、地元行政関係者:8名、研究会:7名)	28名(一般参加者:21名、研究会:7名)	102名(一般参加者・地元関係者:96名、研究会6名)

してできるアイデアを出し合った。



写真－3 秋田県現地研修会の様子

(3) 岡山県西栗倉村・吉井川流域現地研修会

岡山県西栗倉村・吉井川流域をフィールドとして開催した現地研修会は、ウナギの養殖を行っている地元企業のエーゼロ株式会社、応用生態工学会の協力のもと、計28名の参加者が集まり、河口から源流までの吉井川流域の現地視察、座学研修、ワークショップによる1泊2日の充実した研修内容となった。

「吉井川のつながりを取り戻すには小さな自然再生で何ができるか」をテーマとしたワークショップでは、西栗倉村の資源を活用して人と川とのつながりを取り戻す手法や、そのための拠点となる場所について、「小さな自然再生」のアイデアを交えて討議を行った。



写真－4 岡山県西栗倉村現地研修会の様子

(4) 秋田県大仙市・斉内川現地研修会

秋田県大仙市・斉内川をフィールドに開催した現地

研修会は、秋田県の協力を得て、地元の自治体や民間会社、市民団体など100名を超える参加者と一緒になって、積雪の影響で現地踏査はできなかったものの、座学研修とワークショップの研修内容で実施した。

「道の駅と直結した水辺の小さな自然再生と地域の賑わい創出」をテーマとしたワークショップでは、道の駅「なかせん」を交流拠点として、隣接する斉内川の親水性や河川環境の魅力を引き出すための「小さな自然再生」を用いた技術的な議論が行われた。



写真－5 秋田県現地研修会の様子

3-4 「小さな自然再生」普及啓発動画作成

「小さな自然再生」の更なる普及促進を目的に、「小さな自然再生」に取り組んでみたいと考えている人や、施策や資金面で後押しする行政機関や助成団体等の担当者に向けた、小さな自然再生の考え方や具体事例等を紹介する動画(図-3:3分間×2パターン)を制作し、2018年3月に公開した。この動画を教材として活用したいというニーズがあれば、解像度の高いデータの提供も行っており、大学の講義や海外での情報発信などに活用していただいている。



図－3 「小さな自然再生」普及啓発動画

4. ARRN 国際フォーラム／運営会議

2017年8月17日(木)に「第12回 ARRN 運営会議」、
「第14回 ARRN 国際フォーラム」を、第37回国際水理
環境学会国際会議(37th IAHR WorldCongress・マレー
シア・クアラルンプール)に合わせて開催した。以下
にその開催概要について紹介する。

4-1 第12回 ARRN 運営会議

ARRNの理事会に当たる「第12回 ARRN 運営会議」が
開催され、日本・中国・韓国・台湾の各 RRN メンバー、
玉井信行先生(ARRN/JRRN 顧問)の他、イラン等から
も参加し、ARRNの今後の活動計画やネットワーク拡大
に向けた審議が行われた。

本年の ARRN 運営会議では、ARRN 会長及び ARRN 事務
局が韓国(KRRN)から日本(JRRN)へ移管され、新 ARRN
会長に金尾健司氏(元 リバーフロント研究所 代表理
事、現 水資源機構 理事長)が選出された。合わせて、
ARRN 事務局長に土屋信行氏(JRRN 代表、リバーフロン
ト研究所 技術参与)が任命され、今後2年間は、JRRN
が ARRN の事務局を担い、河川再生分野のアジアのハブ
の機能を務めることとなった。

第12回 ARRN 運営会議 次第

<報告事項>

- ・CRRN(中国), KRRN(韓国), JRRN(日本)より
過去1年間の活動概要報告

<ARRN 会長選出・ARRN 事務局長任命>

<審議事項>

- ・ARRNの更なるネットワーク拡大について
- ・ARRN 委員会活動の更なる活性化について
- ・2018年の ARRN 活動計画について



写真-6 ARRN 運営会議の様子

4-2 第14回 ARRN 国際フォーラム

今回の ARRN 国際フォーラムは、「気候変動下におけ
る河川再生のためのガバナンス」をテーマに、中国、
韓国、日本の各国から研究発表があり、その後、パネ
ルディスカッションが行われた。

研究発表では、CRRN(中国)の事務局を務める中国
水利水電科学研究院から「中国における河川再生の技
術と実践の向上」、「高濃度の土砂が黄河のコイに与え

る影響の評価」、KRRN(韓国)の事務局メンバーである
Hyun-han Kwon 教授(Chonbuk National University,
Korea)の学生による「非定常の3変量モデルを用い
た気候変動下における干ばつのリスク評価」、そして日
本からは、山田正教授(中央大学)の学生による「急
縮部を有する河川における水位の時間的流出特性と河
道貯留効果」、「湖沼・ダム貯水池における不確実性を
考慮した水質浄化対策の提案」、「確率微分方程式に基
づく降雨強度の不確実性を考慮した流出解析」、JRRN
事務局から「河道掘削後の植生を予測する指標として
の平常時の水位からの比高」の発表があった。

ARRN 前会長の Jang 教授がコーディネーターを務め
たパネルディスカッションでは、パネリスト、コメン
テータから、研究発表内容を踏まえ、気候変動下にお
ける研究成果の活用や取り組みの進め方についてそれ
ぞれコメントがあった。また、会場からも積極的に意
見が出され、ARRNの拡大に向けた南アジアとの連携の
提案、また環境倫理や社会科学の視点も含めたアジア
の河川再生のガイドライン構築の必要性など、人と自
然が共生してきたアジアの社会・文化的背景を踏まえ、
今後の ARRN の活動の方向性を定めていくべきとの貴
重な提案もいただいた。

第14回 ARRN 国際フォーラム プログラム

<テーマ>

気候変動下における河川再生のためのガバナンス

①開会挨拶・来賓挨拶

②研究発表

③パネルディスカッション

<コーディネータ>

Suk Hwan Jang (ARRN 前会長)

<パネリスト>

Jin Chul JOO

(Korea / Hanbat National University)

Xiaosong WANG (China / IWHR)

山田正(中央大学)

<コメンテータ>

Sung Uk CHOI (Korea / Yonsei University)

Jinyong ZHAO (China / IWHR)

福田勝之

(国土交通省水管理・国土保全局河川環境課)

④閉会挨拶

(敬称略)



写真-7 ARRN 国際フォーラムの様子

5. JRRN 活動に対する表彰

5-1 平成 29 年度河川基金優秀成果表彰

2018 年 1 月 28 日（日）、公益財団法人河川財団主催の平成 29 年度川づくり団体全国事例発表会が東京大学小柴ホールで開催され、JRRN が「小さな自然再生」研究会のメンバーと取り組んだ、平成 28 年度河川基金助成事業『「水辺の小さな自然再生」現地研修会による川づくり人材育成』が優秀成果賞に表彰された。これは、昨年度に続く 2 度目の受賞である。

同発表会では、午前中に事例発表、午後からポスター発表と表彰式が行われた。事例発表では、これまで実施した現地研修会を中心に報告し、「小さな自然再生」という水辺・人・地域を繋ぐ協働のスタイルが各地で取り組まれていること、当活動の地道な成果が少しずつ各地の取組みの後押しにつながっていることを情報発信した。午後のポスター発表では、「小さな自然再生」に興味を持った方々、同様の取組みを実践している方々との意見交換がなされ、活動の継続に関する各団体共通の課題や、より良い投資効果を得るための工夫など、今後の活動の参考となる情報が得られ、川づくり団体ならではの有意義な交流の場となった。



写真 8 河川基金優秀成果表彰式の様子

5-2 第 20 回日本水大賞「国際貢献賞」受賞

2018 年 6 月 26 日（火）、第 20 回日本水大賞表彰式及び受賞団体発表会が日本科学未来館（東京都江東区）で開催され、JRRN が国内外の川づくりの担い手の方々と共に取り組んできた河川再生に関わる国内外の情報共有と人材交流活動「日本及びアジアの河川再生の担い手をつなぐ協働基盤構築」が、日本水大賞の「国際貢献賞」に表彰された。



写真 9 日本水大賞表彰式及び受賞団体発表会の様子

6. おわりに

2006 年 11 月の JRRN の設立以降、JRRN が国内外の川づくりの担い手の方々と共に活動を継続的に積み重ねてきた結果、JRRN 会員の増加を始め、水辺の「小さな自然再生」を含む河川再生を軸としたネットワークの拡大、活動表彰をいただくなど、JRRN に対する対外的な認知・評価が見える形で表れるようになってきた。

JRRN の今後のあり方として、日本水大賞「国際貢献賞」受賞にあたり、JRRN から会員等の協力・支援をいただいた方々に宛てたメッセージ（JRRN ニュースレター 2018 年 7 月号より）を以下に紹介する。

“JRRN が目標とする河川再生の協働基盤構築に向けては、活動の主役はあくまで河川再生を担う国内外の活動主体であり、その主体を横断的に繋ぎ、後方支援し、それぞれの知見を共有しながら諸活動の更なる推進と最適化を図るというネットワーク本来の『触媒的機能』を常に意識して諸活動に取り組んで参りました。中でも、河川再生に向けた新たな行動を起こす人材を増やし育成することや、アジアに向けては、毎年開催する国際フォーラムや海外視察団の受入支援を通じて日本が培った経験を普及し、国内では、河川再生に関わる情報共有ツール（ホームページ、刊行物）の整備や産官学民を交えた講演会や研修行事等を継続的に開催してきました。

これまで JRRN が取り組んできたあらゆる活動は、川づくりに関わる地域の担い手、国内外の専門家、河川を管理する行政関係者等のたくさんの方々のご支援により成立ってきたものであり、この度の「国際貢献賞」の受賞は、JRRN 設立準備期間を含む約 15 年間に渡り共に協働してきた皆様と一緒に受賞したものです。

この第 20 回日本水大賞「国際貢献賞」の受賞を更なる励みとして、今後も国内活動と国際貢献を有機的に連動させながら、地域が主体となる持続可能な河川の管理に資する諸活動を後押し、その担い手を育成するための知見や技術の汎用化とその普及に努めてまいります。また、河川再生に関わるアジアのネットワーク活動のハブ機能を JRRN が担い、日本の河川再生の成功や失敗経験を謙虚に海外に伝承しながら、川づくりを通じてアジア諸国との更なる友好関係の構築に貢献していきたいと考えております。”

（2018. 7 JRRN 事務局一同）